

甲状腺外科草子 141

古文復習：東へ行く西行

杉野 圭三

中学時代に習った古文授業の中で最も印象の強かった和歌は西行の「三夕の歌」である。

心なき身にもあはれは知られけり 鳴立つ沢の秋の夕暮れ (新古今 362)

秋の情景とその心情に中学生ながら衝撃を受けた。
さびしさはその色としもなかりけり 真木立つ山の秋の夕暮れ (新古今 361) 寂蓮

見渡せば花も紅葉もなかりけり 浦の苫屋の秋の夕暮れ (新古今 363) 藤原定家

寂蓮と定家の歌も霞んでしまいそうである。



西行は東大寺大仏再興の寄進を請うため文治 2 年 (1186)、奥州平泉の藤原秀衡を訪れた。

その道中で詠んだ歌が残る。

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命成けり
さやの中山 (新古今 987)

68 歳の西行が小夜の中山 (静岡) を越える時に人生と余命を実感し詠んだ歌であろう。



小夜の中山を越える西行 (西行法師行状絵詞) 七里ヶ浜の富士 (佐藤幸毅撮影)

風になびく富士のけぶりの空に消えて行方も知らぬ
わが思ひかな (新古今 1615)

詞書に「東 (あづま) の方へ修行し侍りけるに、富士の山をよめる」とある。「富士見西行」の絵で有名となった。この時、富士山は噴火していた。

文治五年 (1189)、比叡山に慈円を訪れた時、「この二三年の程によみたり、これぞ我が第一の自歎歌

と申しし事を思ふなるべし」と語ったと、慈円の『拾玉集』に記されている。

また旅の途中立ち寄った大磯には「鳴立つ沢」の歌を詠んだとされる場所があり、現在も「鳴立庵」という史跡が残る。



鳴立庵 (道路沿いの林の中)

西行は奥州への旅で千載集が撰ばれると聞き、気になり都に帰る途中、出会った知人に「鳴立つ沢」の歌が入っているか問うと「入っていない」と答えたので、「それなら都に行ってもしかたない」と引き返したと伝わる。自信のあった歌に違いない。



円位堂 西行像 銀猫碑

「吾妻鏡」によると西行は鎌倉の鶴岡八幡宮で源頼朝と出会い、弓馬や歌のことを夜更けまで語り合った。翌日、頼朝は西行に銀の猫を贈物として渡したが、西行は門を出るとすぐに近くの子どもの手に与えたと伝わる。鳴立庵には西行像を祭る円位堂や銀猫の逸話を物語る銀猫碑が残る。



大磯駅 鶴岡八幡宮 (鎌倉)

鎌倉の小町通りは外国人観光客であふれていたが、大磯の観光客は皆無で静寂に包まれていた。

参考資料：Wikipedia, など

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2025 年 6 月 19 日